

## C-1 グループ研究のまとめ

### 1 研究の成果

本グループでは、「対人関係を円滑に行うための支援の在り方」を探るため、様々な理論や技法を研修し、事例研究を進めてきた。研修を重ね、それぞれの研究を進める中で、教師が児童生徒へのかかわり方を学び、適切な支援を行うことができれば、児童生徒の対人関係が改善されることが分かった。さらに、個別のかかわりが必要な児童生徒への支援方法を探ることは、すべての児童生徒に対するより良いかかわり方を考える手立てとなった。

次の4点は、それぞれの視点から、児童生徒の対人関係を円滑にするための支援のポイントをまとめたものである。

#### (1) 児童生徒に合った表現方法を工夫する

教師は、児童生徒に合った表現方法を工夫し、児童生徒のあるがままの気持ちをくみ取ることが必要である。教師は、児童生徒が自己表現をする方法を言葉だけと考えず、非言語の表現方法なども考慮し、無理なく表現できる方法を考えることが大切である。児童生徒が主体的に自己表現を楽しみ、周囲から認められることにより、自己肯定感や存在感が高まると言える。

#### (2) 児童生徒を共感的に理解する

児童生徒は、教師の言動を敏感に感じ取る。そのため、教師は、児童生徒との気持ちのずれが起きないように、一方的に見たり、固定観念で見ないことが大切である。教師が困っている児童生徒の目線に立ち、じっくりかかわることで、その児童生徒が何に困っているかを共感的に理解することができる。このような共感的な理解を基に、児童生徒への言葉掛けや、今できることを一緒に実践することが必要である。

#### (3) その場限りの支援に終わらず、継続的支援を行う

継続した支援により、児童生徒の心の変化を感じることができ、これまで知らなかった児童生徒の良さや困りように気付くことができ、より児童生徒に合ったかかわり方が見えてくる。また、教師が人間関係作りの支援の継続をすることで、心理的距離が徐々に近づく。

#### (4) 児童生徒を見取るときも支援をするときも教師同士が連携を図る

一人の教師の目で児童生徒を見ると思い込みや経験にとらわれてしまいがちだが、多くの教師の目を見ていくと児童生徒を多面的に理解することができる。また、教師が支援の視点を明確にもち、その視点で連携を取りながらかかわることがより良く支援することにつながり、教師自身も安心して支援を行うことができる。

### 2 今後の課題

#### (1) すべての児童生徒への支援の実践化を図る

研究を通して学んだ支援の在り方を、他の教師へと広げ、すべての児童生徒に対して実践してもらうことが必要である。

#### (2) 支援の継続について

進級あるいは進学しても、継続した支援が受けられるような支援の継続方法を探る必要がある。

#### (3) 連携について

保護者との連携、スクールカウンセラーとの連携、学校間の連携など様々な連携が考えられる。その連携の在り方について探る必要がある。